

アンケート調査による香川県スモン患者の近年の推移

峠 哲男 (香川大学医学部看護学科健康科学)

國土 曜平 (香川大学医学部神経難病講座)

鎌田 正紀 (香川大学医学部神経難病講座)

出口 一志 (香川大学医学部消化器・神経内科)

久米 広大 (香川大学医学部総合内科)

研究要旨

香川県スモン患者の現状を把握する目的で、平成 23 年度と平成 25 年度に、スモン検診調査票から抜粋した 12 項目と、自由記述 1 項目からなるアンケート調査を行なった。平成 27 年度には心電図検査を行った。アンケート調査対象者は平成 23 年度で 17 名、平成 25 年度で 16 名であり、それぞれ、12 名より回答を得た。平成 23 年度と比較して、平成 25 年度では、「足のしびれ」、「転倒頻度」「視力」の悪化を認めた。平成 19 年度と平成 25 年度を比較すると、「運動能力」「転倒頻度」の悪化を認めた。平成 27 年度に実施した心電図検査は、検診受診者 8 名中 5 名で実施し、その内 2 名に関して異常を認めた。2 例とも心疾患を疑う自覚症状を認めなかった。今回の調査結果により、加齢によるスモン症状の増悪傾向および ADL の低下が示唆された。また、スモン検診における心電図検査の有用性が示唆された。加えて患者からの要望により、スモンの二次被害に関する調査も必要と考えられた。

A. 研究目的

高齢化のため、スモン患者の ADL や生活状況は年々変化している。このような状況において、今後の患者支援につなげるため、患者の生活や身体状況の変化を正確に把握することを目的として、アンケートによる調査を実施した。また、スモン検診における心電図検査の有用性について検討した。

B. 研究方法

平成 19 年度に行ったスモン患者に関するアンケート調査を、平成 23 と 25 年度に行い、この 2 年間における患者の動向について考察を行う。アンケートは患者の同意に基づいて行い、記名による自己記述式で、スモン検診調査票から抜粋した 12 項目（「現在の生活の場所」「運動能力」「外出の頻度」「視力」「足のしびれ」「排尿について」「転倒頻度」「気分の落ち込み、いろいろ感」「身体障害者手帳の有無」「特定疾患申請

状況」「介護保険利用状況」「合併症」）及び、自由記述 1 項目からなる。結果については口頭、または紙面での発表を行うが、個人が特定されるような情報については一切公表しないことを約束した。平成 27 年度には心電図検査を行った。

C. 研究結果

我々が把握している香川県におけるスモン患者数は平成 23 年度で 15 名、平成 25 年度で 13 名と、この 2 年間で 2 名の方が亡くなられた。スモン検診受診者は平成 23 年度、平成 25 年度ともに 7 名であり、検診に来られなかった 5 名からは郵送にてアンケートの回答を受け取り、合計 12 名の回答を得た。平成 23 年度のアンケート回答者の平均年齢は 75.5 歳 (45-83 歳)、平成 25 年度の平均年齢は 77.8 歳 (47-85 歳) であった。

「生活の場所」に関しては、平成 25 年度は、自宅 8

名 (67%)、入院中 2 名 (17%)、施設入所 2 名 (17%) であった。平成 23 年度は、自宅 9 名 (75%)、入院中 2 名 (17%)、施設入所 1 名 (8%) であった。

「運動能力」に関しては、平成 25 年度は「寝たきり、あるいはベッドの生活」が 0 名、「移動には車いすあるいは介助が必要」が 5 名 (42%)、「家の中なら何とか歩ける」が 1 名 (8%)、「家の近くなら一人でいける」が 3 名 (25%)、「遠くでも行ける」が 2 名 (17%) であった。平成 23 年度は「寝たきり、あるいはベッドの生活」が 1 名 (8%)、「移動には車いすあるいは介助が必要」が 5 名 (42%)、「家の中なら何とか歩ける」が 1 名 (8%)、「家の近くなら一人でいける」が 4 名 (33%)、「遠くでも行ける」が 1 名 (8%) であった。

「外出の頻度」に関しては、平成 25 年度は「家から出かけることはない」が 1 名 (8%)、「病院に行くときしか出かけない」が 4 名 (33%)、「通院以外にも、時々出かける」が 4 名 (33%)、「よく出かける」が 3 名 (25%) であった。平成 23 年度は「家から出かけることはない」が 1 名 (8%)、「病院に行くときしか出かけない」が 5 名 (42%)、「通院以外にも、時々出かける」が 4 名 (33%)、「よく出かける」が 2 名 (17%) であった。

「視力」に関しては、平成 25 年度は「全く、あるいはぼんやりしか見えない」が 1 名 (8%)、「新聞の大きい字なら見える」が 7 名 (58%)、「新聞の小さい字でも何とか見える」が 2 名 (17%)、「眼鏡があれば、殆ど見える」が 2 名 (17%) であった。平成 23 年度は「全く、あるいはぼんやりしか見えない」が 1 名 (8%)、「新聞の大きい字なら見える」が 6 名 (50%)、「新聞の小さい字でも何とか見える」が 2 名 (17%)、「眼鏡があれば、殆ど見える」が 3 名 (25%) であった。

「足のしびれ」に関しては平成 25 年度は「とても強い」が 7 名 (58%)、「しびれはあるが、あまり苦痛ではない」が 5 名 (42%)、「殆ど問題ではない」が 0 名であった。「足のしびれ」に関して、平成 23 年度は「とても強い」が 5 名 (42%)、「しびれはあるが、あまり苦痛ではない」が 7 名 (58%)、「殆ど問題ではない」が 0 名であった。

「排尿について」は、平成 25 年度は「度々失敗する」が 5 名 (42%)、「時に失敗する」が 6 名 (50%)、「失敗しない」が 1 名 (8%) であった。平成 23 年度は「度々失敗する」が 6 名 (50%)、「時に失敗する」が 5 名 (42%)、「失敗しない」が 1 名 (8%) であった。「転倒頻度」に関して、平成 25 年度は「たびたび転ぶ」が 4 名 (33%)、「転びそうになったり、時々転ぶ」が 6 名 (50%)、「殆ど転ばない」が 2 名 (17%) であった。平成 23 年度は「たびたび転ぶ」が 3 名 (25%)、「転びそうになったり、時々転ぶ」が 6 名 (50%)、「殆ど転ばない」が 3 名 (25%) であった。

「気分の落ち込み、いらいら感」に関して、平成 25 年度は、「現在ある」が 6 名 (50%)、「以前あった」が 5 名、「ない」が 1 名 (8%) であった。平成 23 年度は、「現在ある」が 7 名 (58%)、「以前あった」が 4 名 (33%)、「ない」が 1 名 (8%) であった。

「身体障害者手帳の有無」に関しては、平成 25 年度および平成 23 年度ともに「持っていない」が 1 名 (8%)、「持っている」が 11 名 (92%) であった。「特定疾患申請状況」に関しては、平成 25 年度は、「申請していない」が 1 名 (8%)、「申請している」が 11 名 (92%) であった。平成 23 年度は、「申請していない」が 0 名、「申請している」が 12 名 (100%) であった。「介護保険利用状況」に関しては、平成 25 年度は「利用していない」が 3 名 (25%)、「利用している」が 8 名 (66%) であった。平成 23 年度は「利用していない」が 6 名 (50%)、「利用している」が 6 名 (50%) であった。

「合併症」に関しては、平成 25 年度で、「高血圧」9 名 (75%)、「胃腸病」7 名 (58%)、「関節障害」6 名 (50%)、「白内障」6 名 (50%)、「脊椎障害」4 名 (33%)、「自律神経失調症」4 名 (33%)、「心臓病」3 名 (25%)、「糖尿病」「腎臓病」「肝臓病」がそれぞれ 2 名 (17%)、「膀胱障害」「癌」「うつ病」「パーキンソン病」「甲状腺機能低下症」「重症筋無力症」がそれぞれ 1 名 (8%) であった。

自由記述では平成 25 年度においては 4 名の方から回答を得た。内容としては、ADL 低下に伴う抑鬱感の訴え、高齢化に伴う不安がみられた。一方で、スモンの検診があるおかげで、守られている、見捨てられ

ていないという実感が得られ、闘病に対する勇気を得ているというご意見もいただいた。

平成 27 年度に実施した心電図検査は、検診受診者 8 名中 5 名で実施し、その内 2 名に関して異常を認めた。1 例目は大腸がん手術の既往のある 79 歳男性で、心電図上左房肥大の所見を認めた。2 例目は糖尿病、高血圧、認知症の合併症のある 80 歳女性で、陈旧性下壁心筋梗塞、左房肥大の所見を認めた。2 例とも心疾患を疑う自覚症状を認めなかった。

D. 考察

平成 23 年度と比較して、「生活の場所に関して」は、「自宅」と答えた患者数の 1 名の減少を認め、「施設に入所」と答えた患者数の 1 名の増加を認めた。「運動能力」に関して、「遠くでも行ける」とする患者数の 1 名の増加を認めているが、これは、平成 23 年度は「家の近くなら一人で行ける」と答えていた患者が、平成 25 年度には「遠くでも行ける」と回答している 1 名の患者の運動能力の改善を反映していた。「外出の頻度」に関して、「よく出かける」患者数の 1 名の増加を認めているが、これは、平成 23 年度はアンケートに参加していなかった比較的 ADL のよい患者が、平成 25 年度のアンケートには参加されているためである。「視力」に関しては、「眼鏡があれば、殆ど見える」患者数の減少を認め、「新聞の大きい字なら見える」患者数の増加を認めた。「足のしびれ」に関して、「とても強い」とする患者数の 2 名の増加を認め、「しびれはあるが、あまり苦痛ではない」患者数の 2 名の減少を認めた。「転倒頻度」では「たびたび転ぶ」患者数の増加を認めた。「気分の落ち込み、いらいら感」に関しては、「現在ある」患者数の 1 名の減少を認めている。「介護保険利用状況」に関しては、「利用している」患者数の 2 名の増加を認めた。また自由記述では、4 名すべてが身体機能低下に対する不安を述べており、介護サービスや検診を通じて、精神的なサポートの継続が必要と考えられた。

心電図検査からは二名において未治療の心疾患の合併が疑われ、検診としての有用性が示された。

平成 19 年度と比較すると、「運動能力」に関して、「移動に車いすあるいは介助が必要」な患者数の増加

を認め、「転倒頻度」に関しては「たびたび転ぶ」患者数の増加を認めた。

E. 結論

今回の調査結果により、平成 25 年度では、平成 23 年度と比較して、「視力」「足のしびれ」「転倒頻度」の悪化を認めた。加齢によるスモン症状の増悪傾向および ADL の低下が示唆された。一方で、平成 25 年度時点において 47 歳と比較的若年の患者も存在し、若年発症者に対する療養の継続や、社会においてスモンが忘却されつつあることなどが課題として考えられた。また、スモン検診における心電図検査の有用性が示唆された。加えて患者からの要望により、患者家族の精神的面や生活への影響など、スモンの二次被害に関する調査の必要性も示唆された。

H. 知的財産権の出願・登録状況

なし